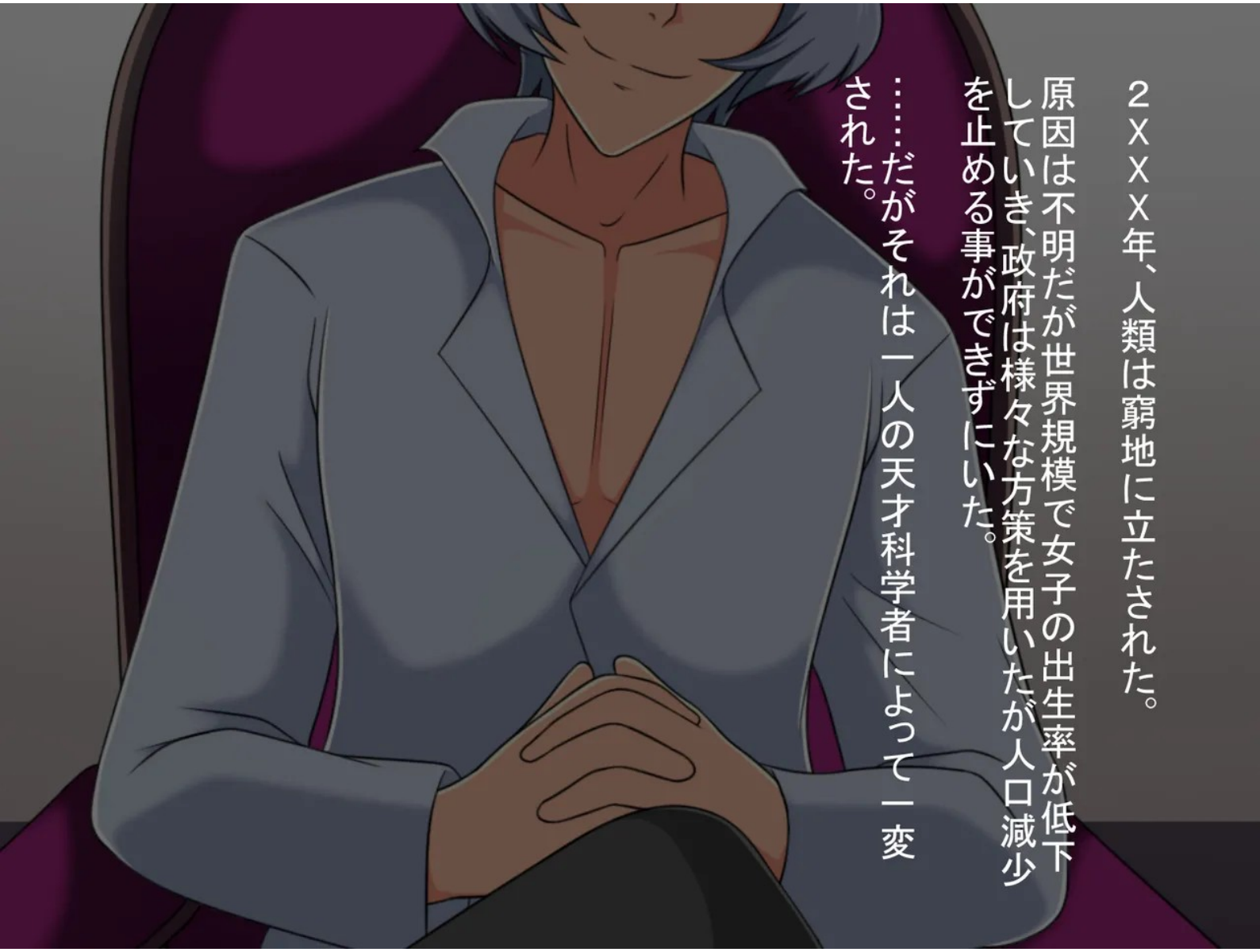
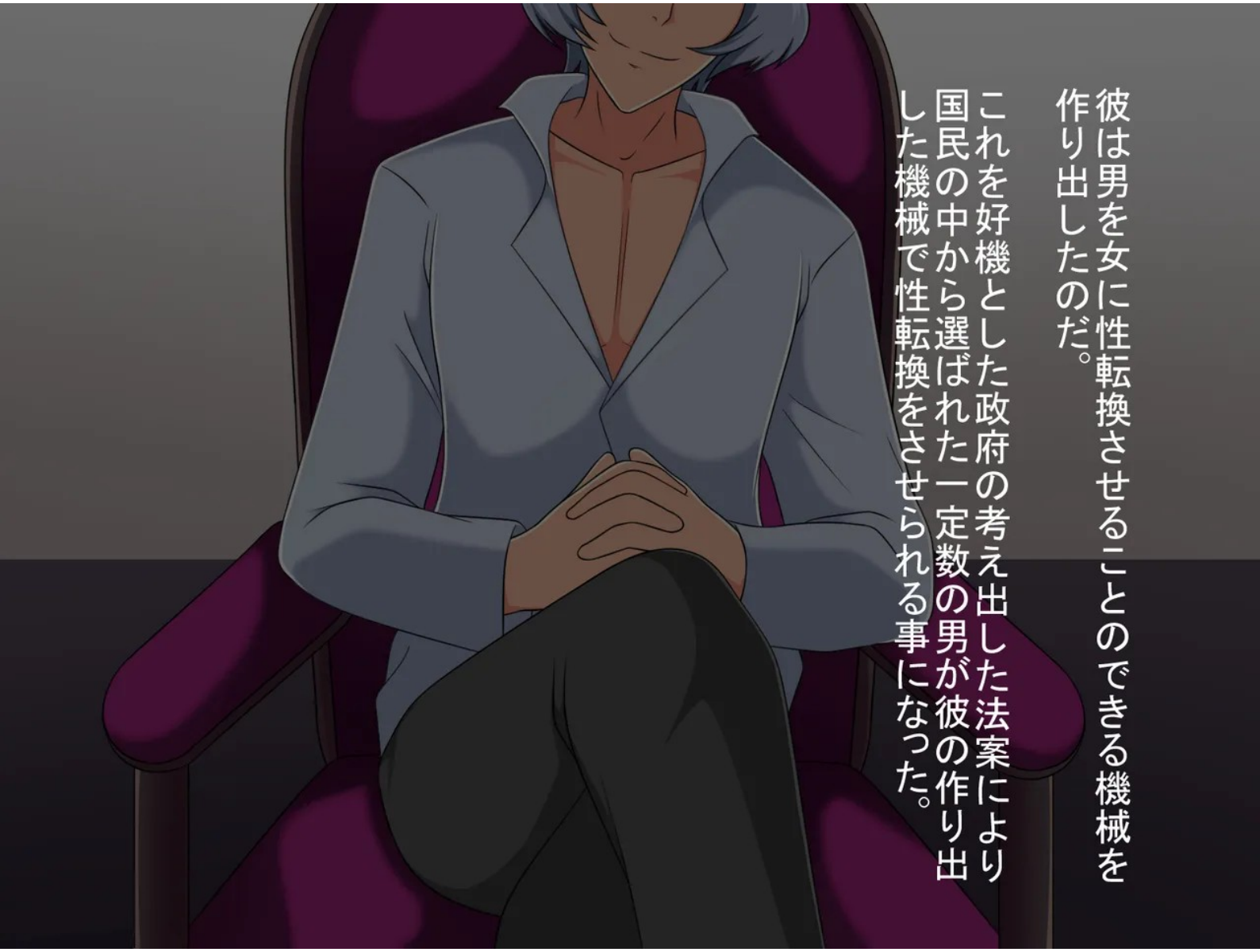
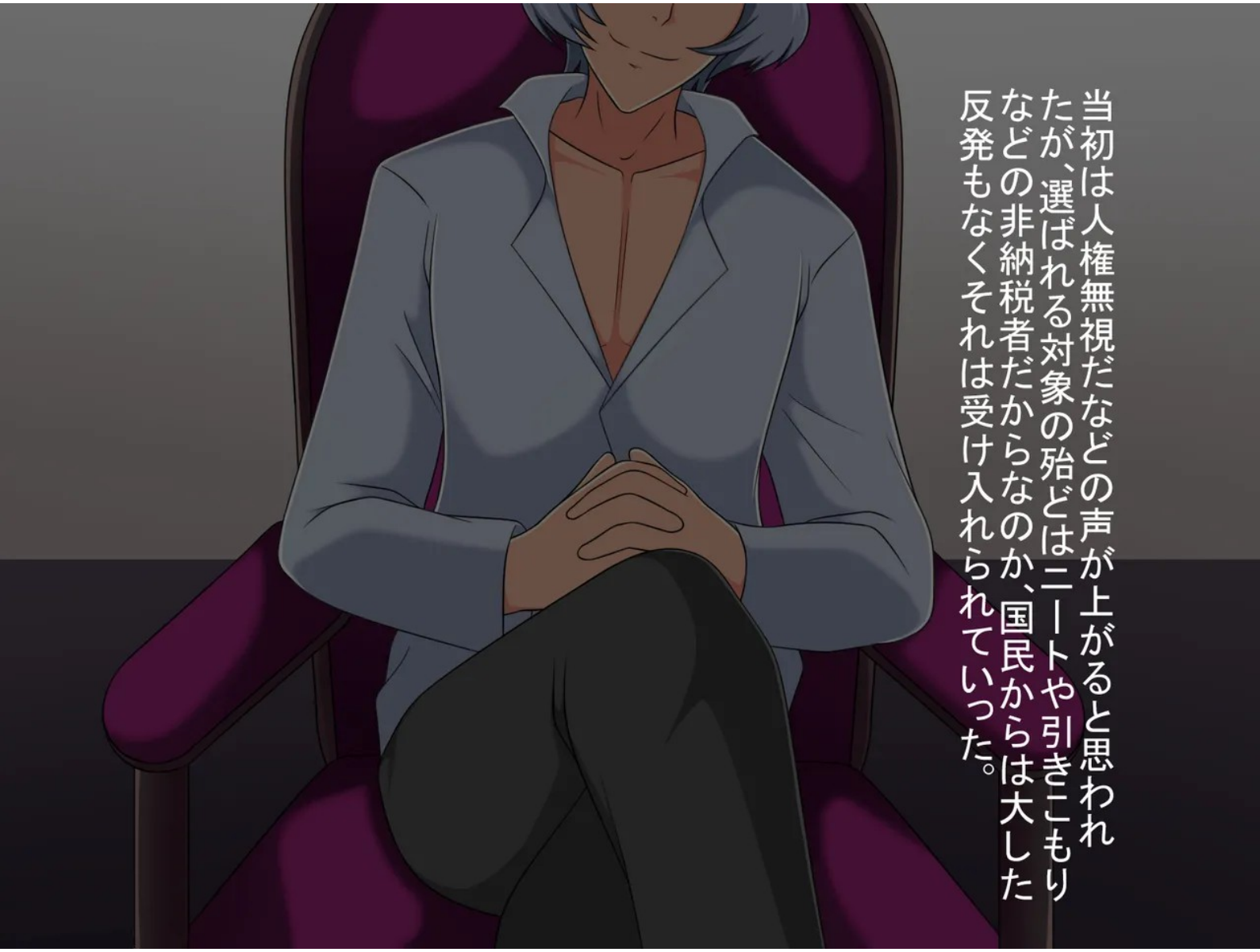
もちもち堂
基本CG14枚
TS法案
～法律で選ばれた男はTSさせられる話～

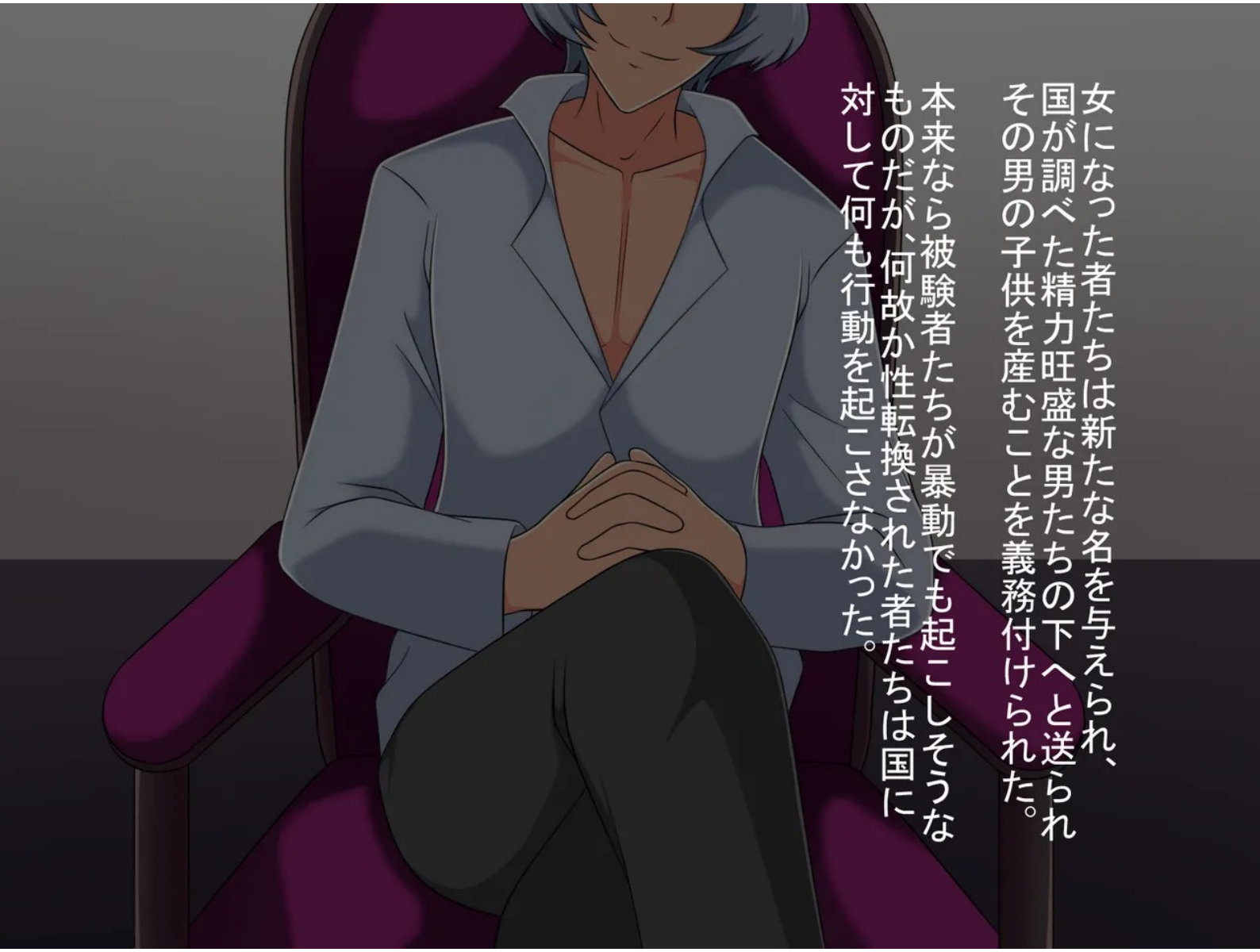

２ＸＸＸ年、人類は窮地に立たされた。
原因は不明だが世界規模で女子の出生率が低下していき、政府は様々な方策を用いたが人口減少を止める事ができずにいた。
……だがそれは一人の天才科学者によって一変された。



彼は男を女に性転換させることのできる機械を作り出したのだ。

これを好機とした政府の考え出した法案により国民の中から選ばれた一定数の男が彼の作り出した機械で性転換をさせられる事になった。


当初は人権無視だなどの声が上がると思われたが、選ばれる対象の殆どはニートや引きこもりなどの非納税者だからなのか、国民からは大した反発もなくそれは受け入れられていった。



女になった者たちは新たな名を与えられ、
国が調べた精力旺盛な男たちの下へと送られ
その男の子供を産むことを義務付けられた。

本来なら被験者たちが暴動でも起こしそうな
ものだが、何故か性転換された者たちは国に
対して何も行動を起こさなかった。

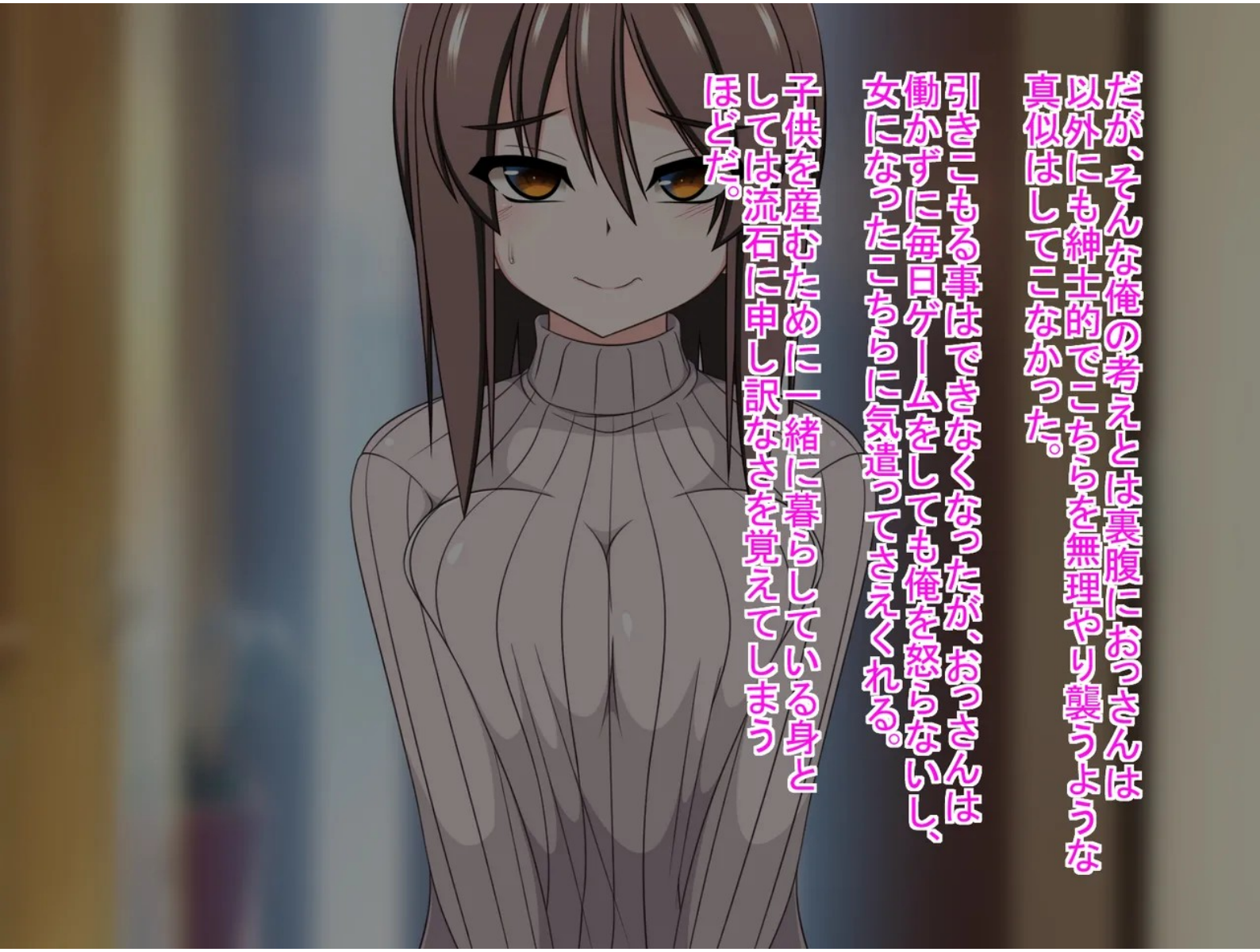
そして、また一人。
女にさせられたニート兼引きこもりが
男の下へと送られていた。

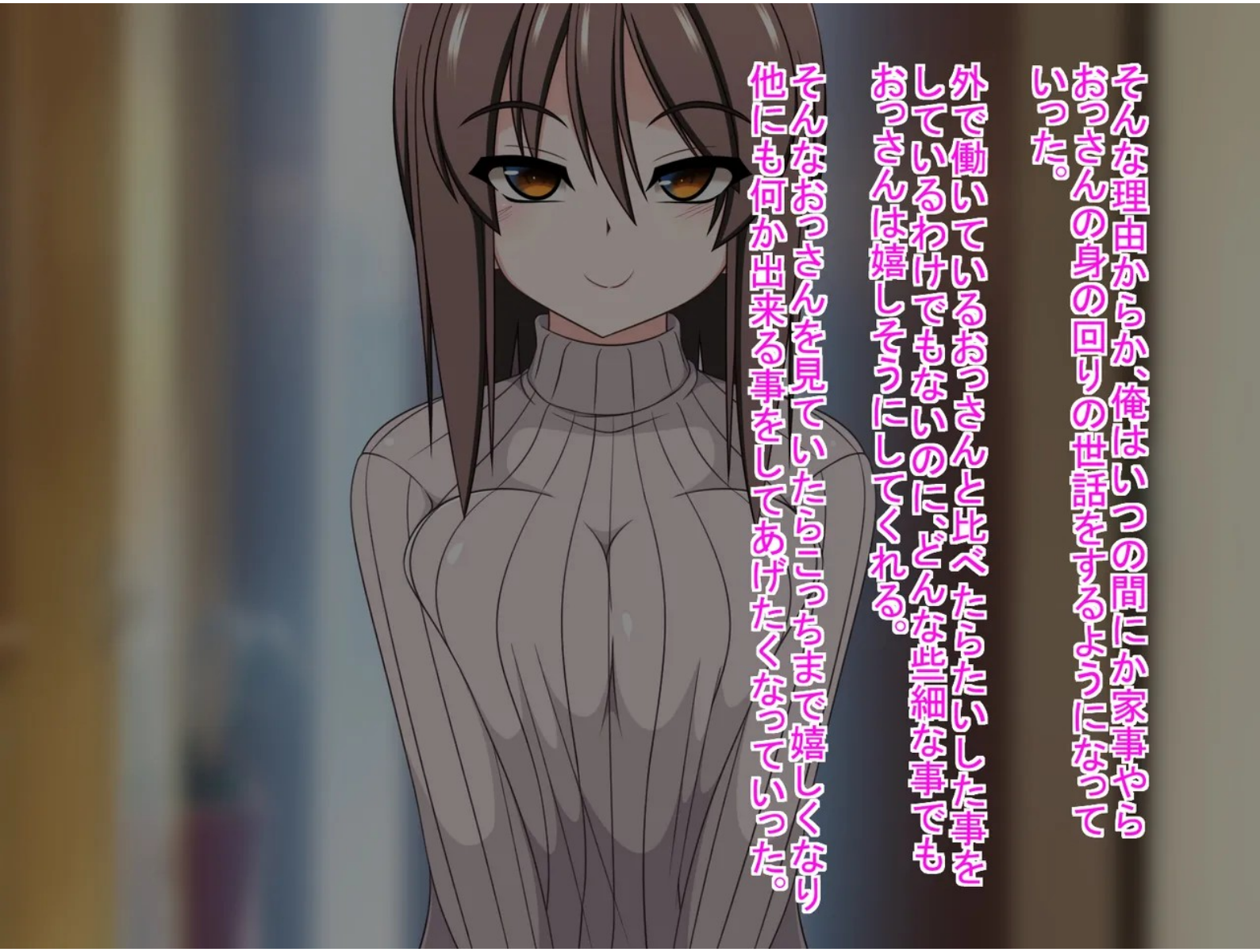
「君が私に振り分けられた娘か」
「…あ、はい。えっと新しい名前は美嘉って言います」
「その先日まで男だったので色々迷惑を掛けるかもしれませんけど、よろしくお願いします」

顔が引きつってしまったかもしれないが
何とか表面上は明るく挨拶をする。
内心どう思っていようが、これから俺はこの
おっさんに世話になるしか道はないので
嫌われないように振舞わなければいけない。

（うぅ～っ！どうして俺がこんな目に…。
ちょっと親の脛を齧ってただけなのに…っ！）
（それにいくら可愛い女の子になったからって
自分相手じゃどうしよもできないし何の得も
ないじゃないかよ）

（まあ、いくら文句を言ったって国相手じゃどうしようも出来ないけど…）
（…これからこのおっさんと一緒に暮らしてセックスもしないといけないんだよな）
（はあ…欝になりそうだ）


だが、そんな俺の考えとは裏腹におっさんは
以外にも紳士的でこちらを無理やり襲うような
真似はしてこなかった。
引きこもる事はできなくなったが、おっさんは
働かずに毎日ゲームをしても俺を怒らないし、
女になったこちらに気遣ってさえくれる。
子供を産むために一緒に暮らしている身と
しては流石に申し訳なさを覚えてしまう
ほどだ。


そんな理由からか、俺はいつの間にか家事やら
おっさんの身の回りの世話をするようになって
いった。
外で働いているおっさんと比べたらたいしした事を
しているわけでもないのに、どんな些細な事でも
おっさんは嬉しそうにしてくれる。
そんなおっさんを見ていたらこっちまで嬉しくなり
他にも何か出来る事をしてあげたくなっていった。

（だからこうやっておっさんの相手をするのも元々の目的を考えたら別段おかしなことではないよな）

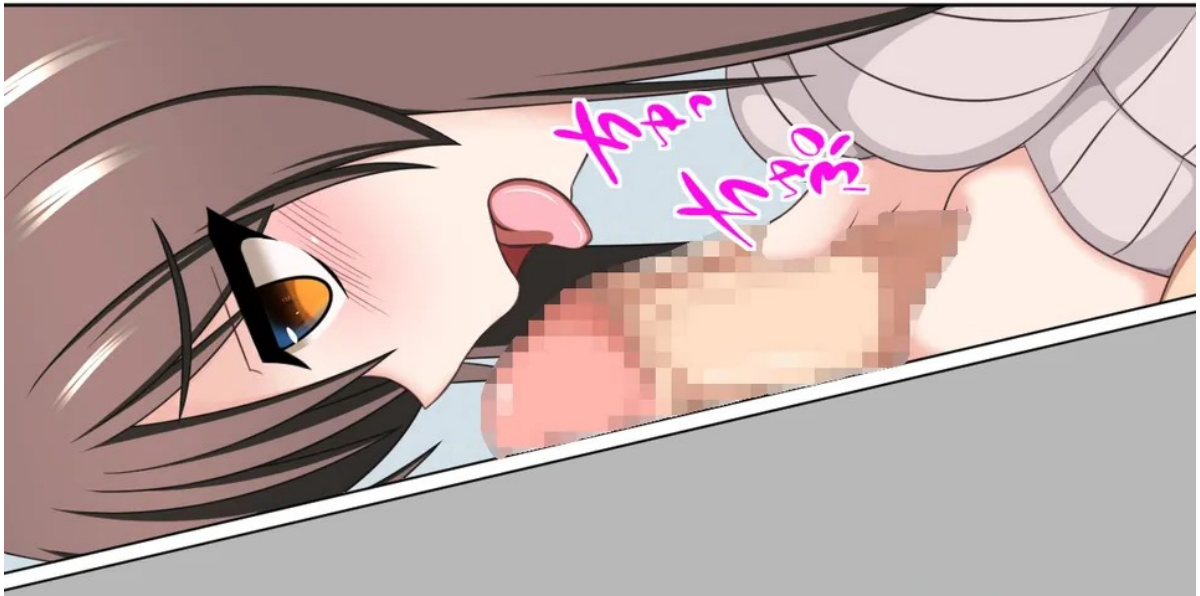
「無理はしなくてもいいんだよ」

「……ん、大丈夫」

正直抵抗が無いわけじゃない。
けどこういう事をするために国から此処に
こさせられたのだ。
（相手がこの人ならまだ受け入れられるしな）

そんな事を考えながら俺は手のひらで脈打つ
それに恐る恐る舌を這わせる。

「あむ´ちゅぷ…じゅぷっ♥んぷっ…れろっ♥」



口の中で熱くビクビクと脈打つそれに唾液を絡めながら舌で舐め上げゆっくりとストロークをする。

元々付いていた物とはいえ、初めての行為に緊張し動きはぎこちないものになってしまう。

だが、そんな俺の行為でも良かったのか
おっさんは気持ちいいよと褒め頭を撫で
てくれる。
俺はそれが嬉しくなり、おっさんをもっと
感じさせたくなり、さらに深く咥え込む。
じゅぽぽ…
ラーラーラー♥

「ん、じゅぶっ♥じゅぷっ♥ぢゅる…ぢゅるるっ♥」
トロトロの我慢汁で口の中はしょっぱさで満たされるが、俺は何故かそれがもっと欲しくなってしまい徐々にストロークを早くしてしまう。
我慢汁と唾液で口の周りがベトベトになってしまうが俺は構わずしゃぶり続ける。
ぢゅる、ぢゅぷ♥
ラ〜〜ラ〜〜♥

「っ！もう出るから口を！」
「～～～～～っ♥」
離れようとするおっさんの足を押さえ付け
俺は喉の奥まで咥え込みドクドクと勢いよく
出る精液を受け止める。
ビクッ
んんっ…♥
ブビュッ

ドロドロと生臭い精液が口いっぱいに広がる。
吐き気を催すほどに不味いはずなのに俺の体は
それを求めてしまう。
まるで至上のご馳走のように味わい飲み込み、
尿道に残ったカスまで吸い出す。
ちゅっ
ちゅぷ
ラーラーラー♥

「んぷっ……じゅる♥じゅるるっ♥んくっ♥
こくっ♥ごくっ♥」
「ん…、ごちそうさま♥」

ト♡ぴ…
ラーメン♥

おっさんは俺の秘所に顔を近づけると愛液で濡れた下着越しに舌を這わせ舐めあげる。
「ひぅっ♥お、おっさんっ♥別にそんなことしなくても…っ♥」
「ダメだよ。初めてなんだからちゃんと準備しないと」
ひぁッ
はッ♥
はッ♥
ぶるんっ…
くちゅ
くちゅ

「ひぁっ♥な、何これ…っ♥こんなの知らないっ♥
んっ♥あ、あぁっ♥おっさんこれダメっ♥
頭おかしくなる…っ♥♥♥」
ん、…♥
ぶるん…♥
はッ♥
はッ♥

あッ♥
あぁッ♥
はッ♥
はッ♥
生暖かい舌に舐め上げられ、秘所からは
ピチャピチャと淫猥な音が部屋に響く。
恥ずかしいと思う一方もっとして欲しいと
思ってしまっている自分がいる。
おっさんに股間を舐められてる恥ずかしさも
気持ちよさの前に徐々に霞んでしまっている
のだ。

「んっ♥はぁ♥はぁ♥あ、あぁっ♥」
ついには拒む事もせず、なされるがまま
何の抵抗もせずに身を任せてしまう。
女の扱いに慣れているのか短い時間で何度も
絶頂させられ、秘所は愛液でビショビショに濡れ
すっかり男を受け入れる準備が出来上がっていた。
あッ♥
あぁッ♥
はッ♥
はッ♥
ビクッ
ビクッ
ビクッ

服を脱がされ布団の上で寝かされる。
自分から言い出したこととは言え、この後
どうなるかを考えると羞恥と緊張で胸が
ドキドキと早鐘を鳴らしてしまう。
ドキッ
ドキッ
はッ
はッ

「入れるよ。…いいんだね？」
「うん、おっさんが相手なら受け入れられるからさ」
「それにこのままずっと何もしてなかったら他の奴に相手を移されるかもしれないし。その…それは何か嫌なんだ」
ん、…
はッ
はッ

「だからさ、お願い」
「…分かった」
おっさんはそう言うとガチガチにそそり立った
イチモツをトロトロに濡れた秘所へと押し付け
膣肉を掻き分けるように挿入する。
ん、…♥
はッ♥
はッ♥

「ふぅ、ぁ…太いのが中に入って…っ♥」
熱い塊が中を押し広げ雄々しいそれは
ビクンと振るえる。
自分の中に異物が入れられてる感覚は
不思議と嫌ではなかった。
あッ♥
あぁッ♥
はッ♥
はッ♥
ずぷッ♥

「はぁ♥はぁ♥んっ♥あぅっ♥あ、あぁぁっ♥」
俺が落ち着いたのを見計らいおっさんは
ゆっくりとストロークを始める。
正直痛くないわけではない。
だが破瓜の痛みすらも波のように押し寄せる
快楽に流されてしまう。
あッ♥
はッ♥
はッ♥
ずぽ♥ずぽ♥

「あっ♥あっ♥や…♥あっ♥あぁっ♥ひぅっ♥
やめっ♥そんなに激しく中擦られたらっ♥」
脳を焼くような快感が自分を変えてしまう
ようで怖くなり、気づいたら俺はおっさんに
足を絡め、しがみ付いてしまう
あッ♥
あぁッ♥
はッ♥
はッ♥
ずぽ♥ずぽ♥

「あ、あああっ♥奥受け入れちゃダメなのにっ♥
子宮が勝手に…っ♥」
おっさんの先端が子宮口に当たるのを感じる。
熱くビクビクと震える肉棒が自分の中を占領し、
圧迫感と快感が混ざり合った衝撃が胸を占めてしまう。
ばんっ…
はッ♥
はッ♥
ずぽ♥
ずぽ♥

「っ！だずぞっ！」
「うん、きてっ♥中にっ♥あっ♥あぁぁっ♥あぁぁぁぁっ♥」
びくん…♥
はッ♥
はッ♥
ずぽ♡ずぽ♡

おっさんは俺に覆いかぶさり子宮口を押し
潰すように、グリグリと擦りつけながら
一番奥で射精する。
粘つくような熱く濃厚な精液が俺の中を
占領するように奥いっぱいへと広がる。
まるで自分の所有物にマーキングするような
行いに俺はもう女にされてしまったのだと
自覚する。
そして、それを嫌だと思っていない自分がいる
のも気づかされた。
あぁッ♥
あぁッ♥
はッ♥
はッ♥
ビュク
ドクッ♥
ドクッ♥

「あは♥おっさん息が荒いな。そんなに俺としたいのかよ♥」
誘うようにお尻を突き出しわざとらしく下着を見せ付ける。
ドキッ♥ドキッ♥
ぱッこ♥
はッ♥

一度してタガが外れてしまったのか、あれ以降
俺はあまり躊躇せずにおっさんとセックスを
するようになった。
男だった時だったら他の男に抱かれるなんて
絶対に嫌だったのに、何故か今はその気持ちも
薄れてきている。
それが女になったからなのか、それとも相手が
おっさんだからなのかは分からないが。
ドクッ♥ドクッ♥
ぱッ♥
ぱッ♥

「んっ♥あぁっ♥入ってきたぁ…っ♥」
おっさんは下着をずらすと後ろから熱く脈打つ肉棒を挿入する。
ズブズブと膣肉を掻き分ける感触だけで軽くイってしまう。最初の頃は自分がこんなにも淫乱だったなんて思いもしなかった。
ぶるんぶるん…♥
ぱッ♥
ぱッ♥
ずぷぷぷ♥

「はぁ♥はぁ♥あっ…ん、んんっ♥」
パンパンと肌がぶつかる淫猥な音が部屋に響き、
俺は肉棒の気持ちよさに自分から腰を突き出し
求めてしまう。
あッ♥
あぁッ♥
はッ♥
はッ♥
パンッ♥
パンッ♥
じゅぷ♥
じゅぷ♥

男だったときの俺に今の事を話しても信じなかっただろう。
自分が男に抱かれ、雌の顔を晒しながら艶声を出してしまうなんて。
だが俺は知ってしまった。
誰かに求められて抱かれるのがこんなに気持ちいいなんてことを。
あッ♥
あぁッ♥
はッ♥
はッ♥
ずぽ♥ずぽ♥

「っ！美嘉ちゃん、出すよ！」
「うん、なかにっ♥おっさんの精液いっぱい出して♥」
パンッ
パンッ
ずぽ♡ずぽ♡
あッ♥
あぁッ♥
はッ♥
はッ♥

熱く濃厚な精液がビュクビュクと子宮内に広がる。
中に出されるたび体は今の状況を喜びビクビク
と痙攣してしまう。
ぶるんぶるん♥
ぱッ♥
ぱッ♥
ぶるんぶるん♥

（こんなの知ったらもう手放したくなくなっちまうよな。…うん、だから俺がこんなふうにおっさんを求めるのはしょうがない事なんだ）
あッ♥
あぁッ♥
ばッ♥
はッ♥
ぶるんぶるん…♥
トロ♡…

「はぁ…はぁ…なか、すごい締め付けてきて…っ！」
「んっ♥もっとオナホールみたいに好きに動いて良いんだぞ♥おっさんが相手なら受け止めてやるからさ♥」
「っ！美嘉ちゃん！」
「ひぁっ♥あ、あぁっ♥こんな犬みたいに後ろからパンパンされてるのに…っ♥体が喜んじゃってる♥」
はっ♥
はっ♥
はっ♥
いぃ♥

おっさんはお尻を鷲掴みしながら激しい動きで
膣肉を抉る。
獣のような、まるでただ雌を犯し孕ますだけの
動きに頭が沸騰してしまいそうになる。
じゅぷ♡
じゅぷ♡
パン
パン
はッ♡
はッ♡
はッ♡
じゅぷ♡

「あはっ♥膣内であっついのムクムクって大きくなってきたぁ♥」
「あ、あぁっ♥すごっ♥おっさんもっと♥もっとしてぇ♥んんっ♥なか、ずぶずぶ抉って奥コンコンってされるのすきぃ♥」
じゅぷ♥じゅぷ♥
パン♥パン♥
はっ♥
はっ♥
あっ♥
あぁっ♥

「…っ！」
「あ…っ♥なかでビクンってしたぁ♥
もう出したいんだぁ♥ふふ、いいぞ♥
好きな時になかで出していいからな♥」
じゅぽ♥じゅぽ♥
パン♥パン♥
はっ♥はっ♥はっ♥
あっ♥あっ♥

俺の言葉を聴き終えるとおっさんは腰を深く
押し付け、肉棒の先端で子宮口をグニグニと
苛めながら射精する。
まるで自分の物だと主張するような射精に
深くイってしまい頭の奥がチカチカと光って
しまう。
どぷ
はッ♥
はッ♥
はッ♥
ぐんぐん…♥

「あぅ♥ドロドロの精液で子宮のなかマーキング
されてるぅ♥」
「俺のおまんこ、おっさんの物にされちゃってるぅ♥」
グポォ♥
はッ♥
はッ♥
ぶるん…♥
ぶるぶる♥

「ひぁっ♥そんなにおっぱいグニグニしちゃ…っ♥
あっ♥んんっ♥おっぱい弄られてるだけなのに
俺、感じちゃってるっ♥」
ビクッ…
ビクビク…
なぁ…♥
なぁ!!♥
ぐぐぐ♥

いつも働いてくれているおっさんを労うため
ちょっとエッチな水着を買ってお披露目したが
興奮したおっさんに襲われるように抱きつか
れてしまった。
期待してなかったと言えば嘘になるが俺なんかで
ここまで喜んでくれるとは思はなかった。
なぁ♥
なぁ♥
こりこり…
ぐりぐり♥

荒い息を吐きながらおっさんはビクビクと熱く
脈打つ肉棒を背中に当ててくる。
これからめちゃくちゃに犯されると思うと期待と
興奮で濡れてしまう。
ビクッ…
ビクッ…
なぁ…♥
なぁ♥
ごくり♥

「…あ♥」
おっさんは水着をずらし、お互いの性器をクチュクチュと擦り合わせる。そして俺の体の準備が出来上がっているのを確認するとそのまま一気に挿入する。
すっかりおっさんの形にされた膣内は何の抵抗もなく、それを喜んで受け入れた。
ぐぐぐ…
ぐぐぐ
ぐぐぐ
ぐぐぐ
ぐぐぐ
ぐぐぐ
ぐぐぐ
ぐぐぐ

「んっ♥んんっ♥はぁ♥はぁ♥あ、あうっ♥」
火傷しそうな程に熱い肉棒が中を掻き分ける度、
膣肉はよりいっそう締め付け愛液を更に溢れ
させてしまう。
ぐぐぐ…
ぐぐぐ…
ぐぐぐ
ぐぐぐ
ぐぐぐ

「ひぐっ♥ごりごりって下から突き上げられて…っ♥
あっ♥あぁぁぁ♥オマンコ抉られるの気持ちいい♥」
既に男としての自分は薄れ、俺は自分が女である
事を受け入れ素直に与えられる快楽を貪る。
ぐぐぐ…
ぐぐぐ…
ぐぐぐ
ぐぐぐ
ぐぐぐ
ぐぐぐ

「んっ♥中でビクビクって…っ♥」
膣内で肉棒が更に大きくなるのが分かる。
もう限界なのだろう、俺の体はおっさんのイク
タイミングを覚えており、それに合わせる
ようにこちらも気分が高ぶっていく。
俺が膣内の締め付けを強くし射精を促すと、
おっさんの肉棒は一際大きく震え、子宮の
一番奥目掛けて射精する。
ぶるっ♥
ぶるっ♥
ぶるっ♥

「…っ♥あぁ♥きたぁ♥いちばんおくぅ♥
おっさんのどろどろあっつい精液でいっぱいに
されてるぅ♥」
ぶしゅ♥
ぶしゅ♥
ぶしゅ♥
ビクッ
ビクッ…
ビクッ…
ビクッ…

「あむっ♥ちゅっ♥しゅきぃ♥これ、しゅきぃ♥」
子宮内から伝わる熱に幸福と満足感を覚えながら、
気づいたら俺は自分からおっさんの唇を求めて
しまっていた。
だが、おっさんはそんな俺を拒むことなく思いに
応えてくれるように舌を絡ませてくれる。
ちゅぷ
ちゅぷ
はーっ♥
はーっ♥

「ちゅぶ、あむ…ちゅ、ちゅる♥」
まるで恋人同士が余韻を楽しむように俺たちは
深いキスを交わし続けた。
ちゅぷ
ちゅぷ
はーっ♥
はーっ♥

「そんなに吸ってもまだ妊娠していないんだから
母乳はでないぞ♥…そんなに欲しいならちゃんと
妊娠させないとな♥」
いつもは頼もしいおっさんが胸にしゃぶりつき
まるで赤ん坊のように甘えてくる姿に何だか
可愛らしく思えてしまう。
はッ♥
はッこ♥
あッ♥
むにゅ
くちゅ
くちゅ

「あんっ♥はぁ…っ♥あぁ♥乳首、舌でコロコロされて…っ♥どうしようエッチな気分になってきたぁ♥」
巧みな舌使いで乳首を弄られゾクゾクとしたものが背筋に走る。
高められた快感に口から甘い吐息が漏れてしまう。
はッ♥
はッ♥
むにゅ
くちゅ
くちゅ

「たく、こんなにガチガチに勃起させて。こっちは全然、赤ちゃんじゃないな♥」
「ほら、ガチガチちんぽシコシコしてやるからな♥」
はッ♥
はッ♥
むにゅ
くちゅ
くちゅ

「うぁ♥すごっ♥我慢汁トロトロ出てきて
手がベトベトになっちまう♥」
我慢汁を潤滑油にクチュクチュと音を立てさせ
ながら扱いていく。
胸を吸われながら肉棒を擦っているだけなのに
俺まで興奮してきたようだ。
はッ♥
はッ♥
あッ♥
むにゅ
くちゅ
くちゅ
にゅち
にゅち

「んっ♥おっさん、もう出そうなのか？
いいぞ♥俺の手の中でビュッビュ～っていっぱい
出しちまえ♥」
手の中で熱く脈打つ肉棒が一際大きく震える。
俺は手の動きを早くし一気に射精まで促した。
はッ♥
はッ♥
あッ♥
むにゅ
くちゅ
くちゅ
にゅち
にゅち

「あは♥すごっ♥おっさんの精液、手の中でビュルビュルって出てるっ♥」
「毎回こんなのを中に出されてたら直ぐに妊娠しちまうよ♥」
ぱっ♥
はッ♥
ああッ♥
むにゅ
くちゅ
くちゅ

「おいおい。なんで直ぐに硬くなるんだよ。
…もしかして妊娠させたとこ想像して
興奮しちまったのか？」
「あれだけ出したのにまだこんなになる
なんて絶倫すぎだろ。まったく元男相手に
こんなにしやがって」
ビクッ♥
ビクッ♥

「元、だろ？今は私の女さ」
「ば、ばか！何恥ずかしいこと言ってんだ！
…たくっ、チンポこんなにしてるくせに」
んっ…♥
ビクッ♥
ビクッ♥

ぐにぐにと手で弄るとまだ物足りないと言わんばかりに硬さを増してくる。
むせ返るような雄の臭いと肉棒の熱さに体が思わず反応してしまう。
んっ…♥
ビクッ♥ビクッ♥
くちゅ
くちゅ

「…っ、美嘉ちゃん！」
「…んっ♥このまま中に入れたいのか？
精液まみれのチンポ突っ込みたいなんて
本当におっさんはスケベだな♥」
んっ…♥
くちゅ
くちゅ
ズンッ♥
ズンッ♥

「ん…っ♥」
精液まみれの肉棒を自分から秘所へと押し当て
ゆっくりと腰を下ろして挿入する。
ニュルニュルと精液と愛液が絡み合い、肉棒は
膣内を押し広げ中を掻き分ける。
ずぷぷ♥
ビクッビクッ♥
はぁ♥
はぁ♥
ぶるる♥

「あは♥やっぱ、おっさんのチンポ気持ちいいっ♥」
「んっ♥あぁっ♥どうしよう、これ無しじゃ俺もう生きていけないよぉ♥」
「美嘉ちゃん…っ！」
はぁ…♥
はッ♥
あッ♥
じゅぷ♥
じゅぷ♥

昂ぶっていく俺の声に興奮したのか徐々に
おっさんの腰の動きが早くなっていく。
俺もおっさんの動きに合わせるように擦り合わせ、
俺たちはまるで動物の交尾のようにただお互いを
貪りあった。
はぁ♥
はぁ♥
あぁ♥
あぁ♥

びゅぶるる～っ！
「んっ♥んんっ♥はうっ♥奥にいっぱいっ♥
あっついのでてる…っ♥」
はぁ…♥
はッ♥
ぶるぶる♥
ぶるぶる…♥

膣壁は肉棒に絡みつき射精を促し、肉棒は
それに応えるようにビクリと震え何度目
かも分からない射精で膣内を満たす。
熱い精液を子宮内で受けながらも、ようやく
一息つけると思った俺に構わずにおっさんは
更に腰を突き上げてきた。
はぁ…♥
はッ♥
ぐぐぐ♥
ぶるるっ…♥

「ま、待って♥射精中にそんなに動かされたら
頭の奥、焼けそうで…っ♥おかしくなる♥」
「ひぐぅっ♥だめっ、これもう無理…っ♥」
はぁ…♥
はッ♥
ぐぐぐ♥
ぶるぶる…♥
ずぽ♥ずぽ♥

足を押さえ付けられ奥へ奥へとと突き上げる
動きに翻弄され、俺はなすがままにされてしまう。
子宮口を先端で押し付けられる度に背筋に電流
が走るような歓喜が襲うのだ。
はッ♥
はッ♥
あッ♥
あぁッ♥
ぶるるっ…♥
ずぽ♥ずぽ♥

（…あっ♥頭の中が白く…っ♥チカチカ点いたり
消えたりするっ♥気持ちいいの、止まらない…っ♥）
はぁ♥
はぁ♥
あぁ♥
ぐちゅぐ…♥
ずぽ♥
ずぽ♥

「…流石に出しすぎて疲れたよ」
おっさんは俺の膝の上に頭を乗せたまま寝そべる。自分が誰かに膝枕をするなんて思ってもいなかった。
（…けど、こんなのも悪くないって思えるあたり、もう俺も昔とは別人だよな）

「まったく好き放題やりやがってこんなの絶対に孕んでるぞ」
「大丈夫だよ、ちゃんと責任は取るから」
なんの躊躇もなく言い切るおっさんに嬉しさと恥ずかしさがごちゃ混ぜになり頬を赤くしてしまう。

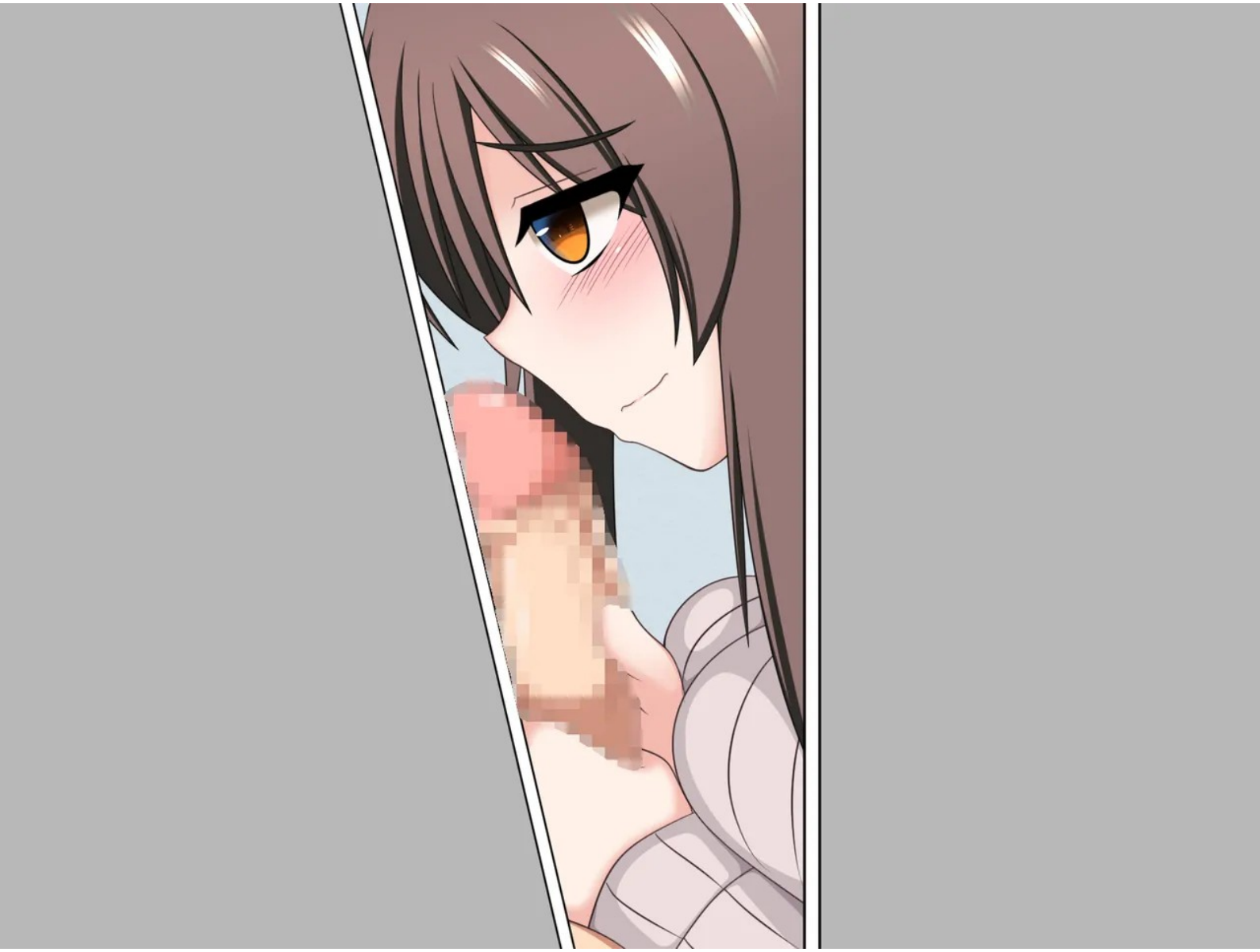
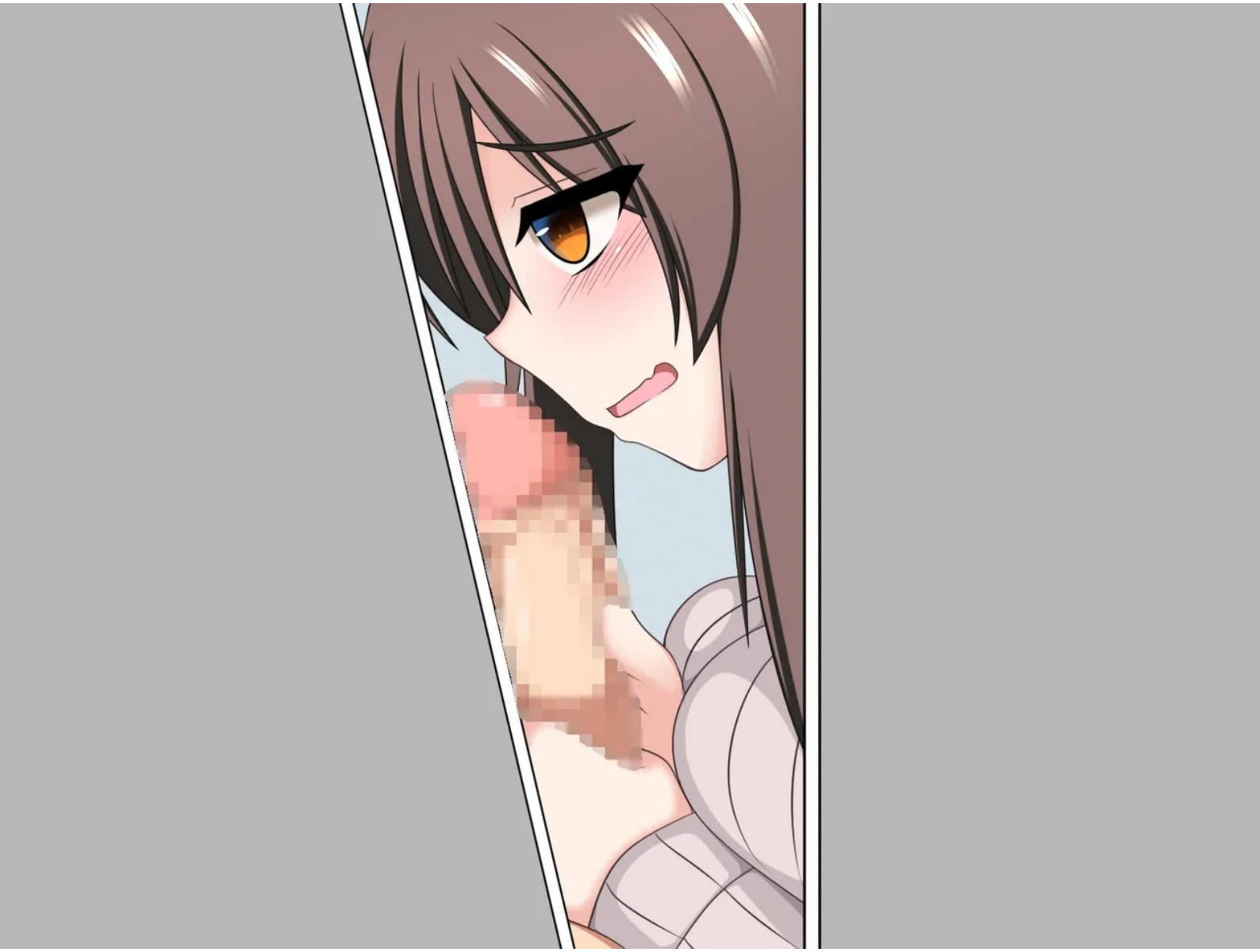
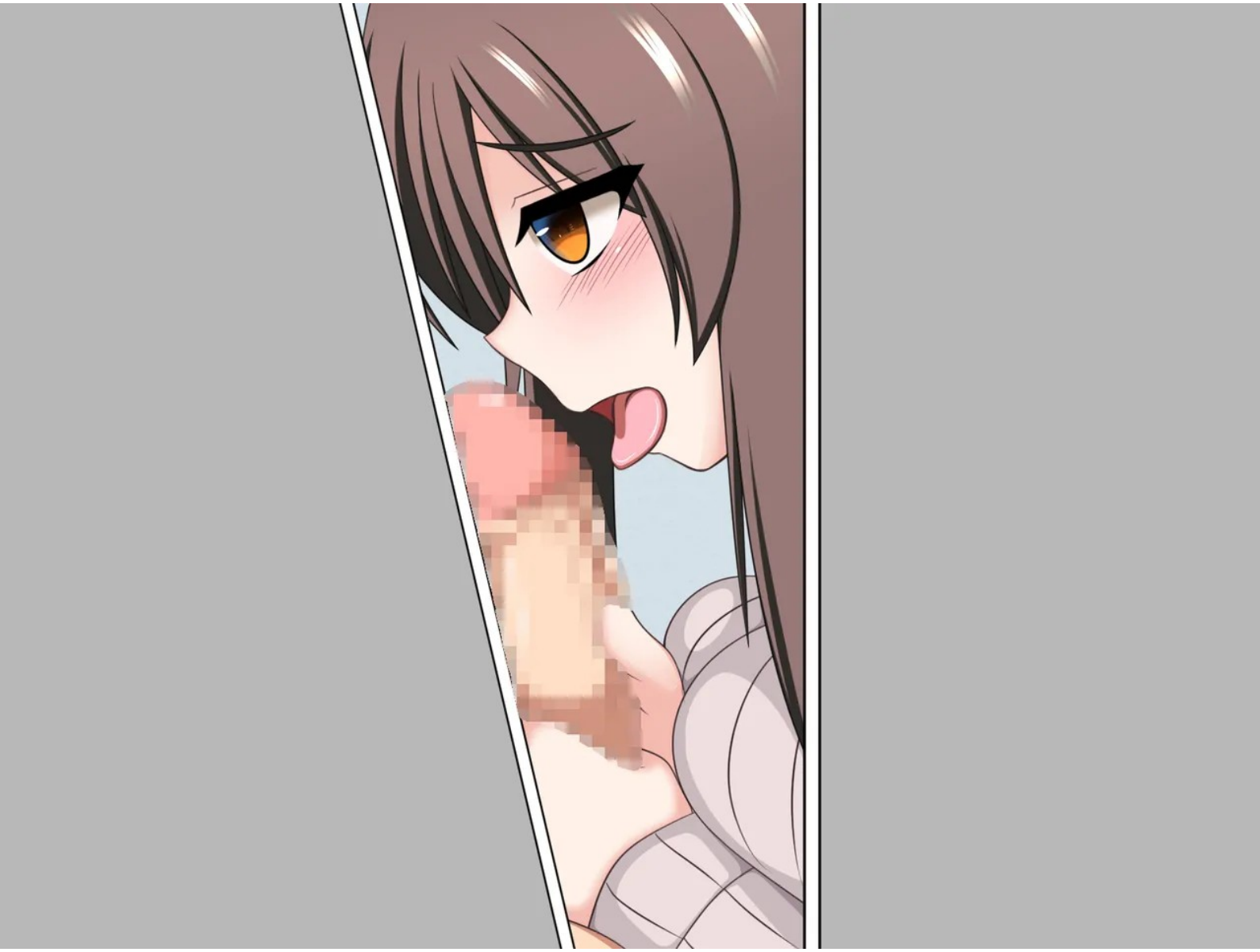
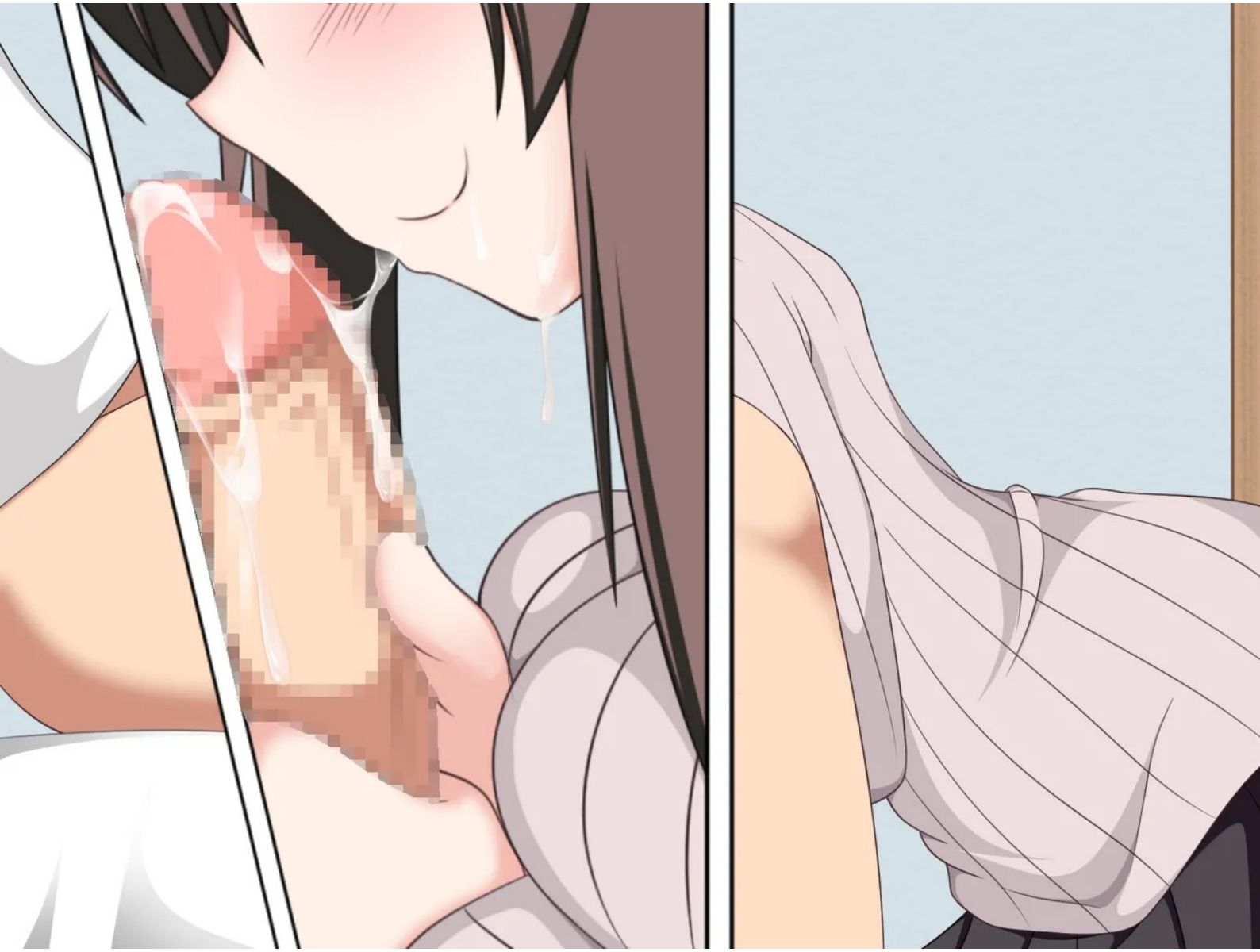
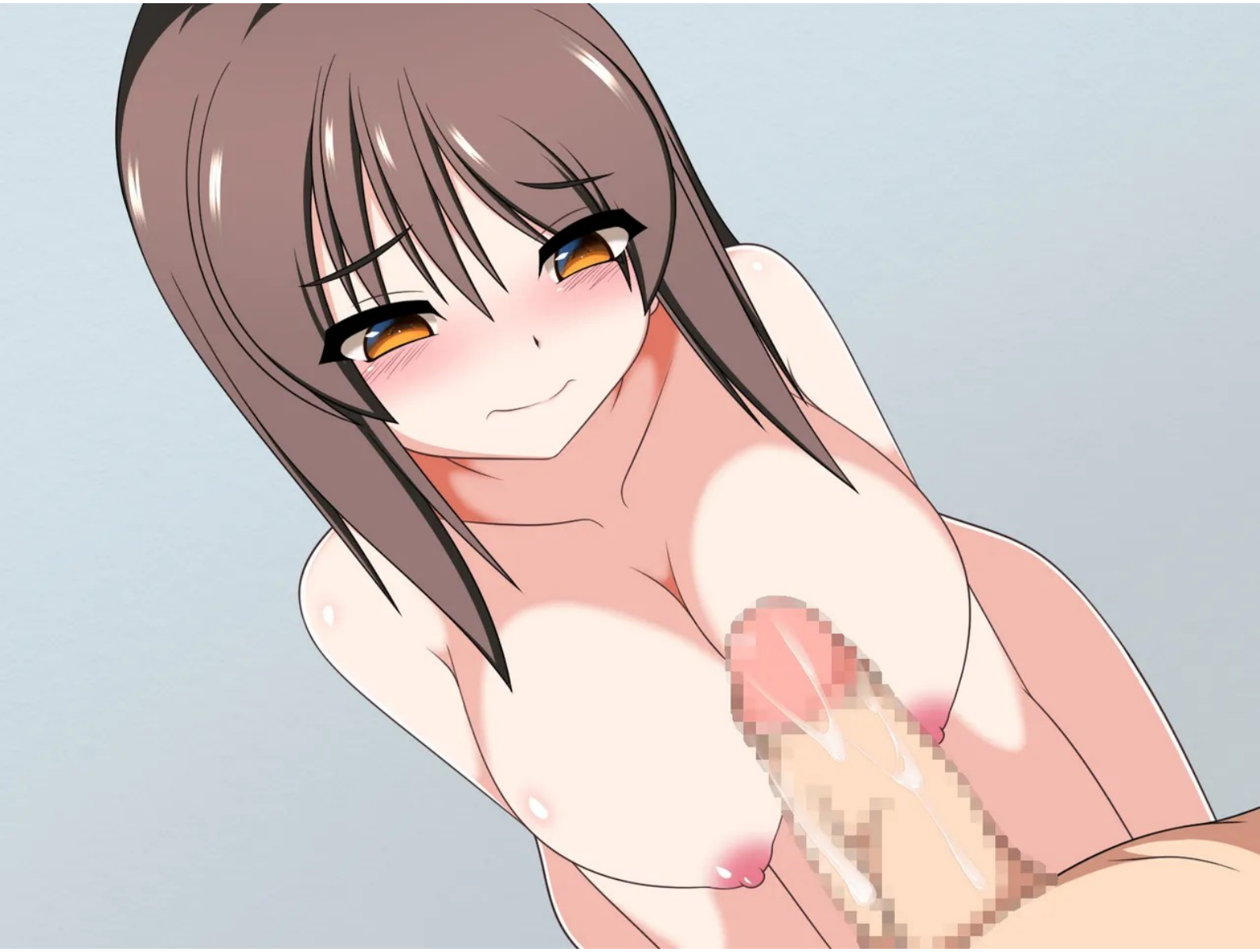
「ばーか♥言われなくても
そんなの分かってるよ♥」
「これからはパパになるんだから
ちゃんと俺たちを養ってくれよな♥」

「…んっ♥おっさんのチンポが奥に当たって
赤ちゃん驚いてる♥」
「産まれる前からこんなの教え込まれたら
エッチな子になっちゃいそうだ♥」
はーっ♥
はーっ♥
ずぽ♥ずぽ♥

お腹が大きくなってからも俺たちはお互いを
求め愛し合っていた。
最初はお腹が大きくなるにつれて不安な気持ち
が大きくなっていった。
だが、そんな時も優しく愛してくれるおっさんの
おかげで俺も落ち着きを取り戻していき、
今では毎晩のように交わり合っていた。
はーっ♥
はーっ♥
あぁ…♥

（…なんで、男に戻りたいって奴がいないのかようやく分かった♥）
（こんなに気持ちよくて幸せで、家事を普通にすれば今までどおり遊べるんだ）
（そりゃ、元ニート誰も戻りたがらないわな）
（今の時代、子供の世話をしてくれる機械もあるし子供を産んでも面倒な事なんて殆どないからな）
（…何だかんだで今は幸せだし俺は女になってよかったかな？）
は～♥
は～っ♥

「…全く我ながら素晴らしい物を作ってしまったな」
「君もそう思うだろ？」
「…ん？よくこんなので問題が起こらないなって？」
「おいおい、何を言い出すのかと思えば…
そんなの当たり前じゃないか」

「多くの人間は誰かに認めてもらいたい。
愛されたいと思うものさ」
「性転換した者らは気づいていないかもしれないが、
それが元に戻りたいと言い出さない一番の原因だ」
「都合のいいことにニートや引き篭もりはそれを
受ける機会が少ない。だからこそ彼らは被験者に
選ばれ、僕はそれを貰える容姿と性別にして
あげたのさ」
「…後は、男性の好みに合わせて彼女らを送れば
いい」

「な？簡単なことだろ？」
「これは彼らの為になるし、他の健全な男性らの役にも立つ画期的な技術なのだよ」
「そして時間は経つにつれ心も体に順応していき本当の女性になるというわけだ。心まで完全に女性になってしまったら、もう男に戻りたいなんて思わないよ」
「男だったとき女になりたいと思わなかったのと同じようにね」
「全く、こんなものを開発してしまうなんて、本当に僕は天才だな」